

# 言語における二・三の問題

(その一)

原 口 庄 輔

## 1. はじめに

今やコンピュータの発達に従って、ほとんどすべてのものは二項的(binary)に処理可能であると広く考えられている。物事の基本は二つであるというのである。しかし、すべてのものを二つに分けるのは、何も今に始まったことではない。例えば旧約聖書の時代から（さらにおそらくはもっと前から）なされていることである。このことは旧約聖書の創世記(Genesis)の出だしから明らかである。

- (1) a. 神が天 (the heaven) と地 (the earth) を創造した。
- b. 光(light)とやみ(darkness)とを区別した：昼(Day)と夜(Night)。
- c. 夕 (evening) があり朝 (morning) があった。
- d. かわいたところを地 (Earth) と名づけ、水の集まったところを海 (the Seas) と名づけた。

さらに中国では、陰陽道に二項的な考え方が用いられている。

こうしてみると、すべては始めから二項的であり、すべて二項的なものに帰着できるかのように思われるかもしれない。確かに、二項的に処理できるものが多いことは認めなければならない。二が基本であることは、人間はもちろん生き物の遺伝子 DNA が、AとTの対と、CとGの対からなっており、すべてのタンパク質がこの二対の組み合わせからなっていることに端を発している。男の精子と女の卵子が合体して、細胞は、二つに次々に分裂して行く。したがって、ガマの油売りではないが、1枚が2枚、2枚が4枚、4枚が8枚、8枚が16枚、16枚が32枚、32枚が64枚、128、256、512、1024、2048、4096、8192、16384、……と倍々に分かれて行くのである。このように、自然界では二が圧倒的に優

勢である。

しかし、例えば音楽の場合、二拍子のマーチに対して三拍子のワルツがその地位を厳然と占めている。また、政治の仕組みとしては、三権分立が採用されており、キリスト教では神・聖霊・キリストが三位一体 (Trinity) をなすものと考えられている。人間に関しても、肉体・精神・靈魂の三つ (trichotomy) からなっているとみなす考え方もある。遊びでもじゃんけんは、グー・チョキ・パーの三竦みである。時には、「グーなし、ジャンケンポンよ」などと、勝負を急ぐこともないわけではないが、ジャンケンの本質は、三竦みである。

ことばの世界でも、一・二・三が用いられている。それぞれ、一項的 (unary) 二項的 (binary) 三項的 (ternary) と言われており、例えば動詞の分類などにおいて、一項動詞・二項動詞・三項動詞などと分類されている。数の扱い方でも、単数複数のように、二項的なシステムをとる言語が多いにしても、単数両数複数の三項システムをとる言語も見受けられる。性 (Gender) に関しても、男性 (Male) と女性 (Female) の二項体系をとる言語と、男性・中性 (Neuter) ・女性の三項体系をとる言語もある。

有標 (marked) 無標 (unmarked) のように二項体系のものや、デカルトのように肉体と精神を分ける二元論がかつては幅を利かせていたが、最近では、東洋の考え方が取り入れられ、肉体と精神は、相即相入の関係にあることが、広く受けいられている。しかし、ことばの上では、肉体と精神は依然として二項的に分けられている。もっとも「二兎を追う者は一兎をも得ず」のように、同時に二つのことをすることを戒める格言もある。われわれの体も目や耳、手足のように二つからなるものが普通で、三つ目小僧のように目が三つあるのはお化けの世界の話である。

スフィンクスのなぞのよう、四・二・三を使うものもあるが、それらは比較的境界である。われわれの世界では、二次元 (平面) ・三次元 (立体) が中心で、四次元 (立体プラス時間) の世界というものは、普通の人にとっては、具体的なイメージがわきにくい。

このように二が圧倒的に多いにしても、三のつく表現も決して少なくない。

- (2) a. 三種の神器
- b. 三姉妹
- c. 三国一
- d. 三国同盟

- e. 三角関係 (triangular love affair)
- f. 三三, 五五
- g. 三方一両損
- h. 三原色

もっとも、これらの表現のうち、(2e)の三角関係は、二になろうとする傾向があることは、周知のことである。三という数字は、人間関係以外においては、ある意味では安定感のある数である。有名な「鼎 (かなえ: tripod)」は安定性があるものの代表格である。倒立は、二本の腕で支えるのは難しいが、頭を使った、三点倒立なら、かなり容易になる。最も、「散々待たせる」の「サンザン」は、別物であるが。

## 2. 音韻論における二と三

言語は、音声と意味が形式を介して結びついたシステムである。音声の研究をするのは音韻論 (phonology) であり、意味の研究をするのは意味論 (semantics) であり、形式の研究をするのは統語論 (syntax) である。このほかに、語の研究をする形態論 (morphology) がある。本節では、まず、音韻論における二と三について考察を加えることにする。

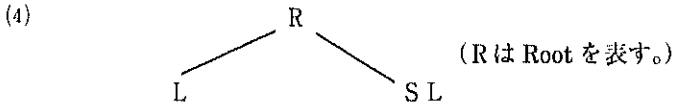
音韻論においてまず考えるべきは、目下のところ最小単位と考えられている弁別素性 (distinctive feature) についてである。ヤコブソンやトゥルベツコイなどに始まる弁別素性は、二項的なものが基本であるが、一見したところでは、一項的なものや三項的なものも、次に示すようにある。

(3) Privative	1 : 素性指定あり ; [voice]
Binary	2 : プラスマイナス ; [±high]
Ternary	3 : プラスマイナスと 0

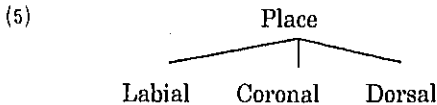
しかし、欠如的 (Privative) な対立も、無指定なものとの対立を前提としているから、広い意味では二項的であるとも考えられる。また、三項的なものも、ゼロ (0) の値を許すことを除けば、基本的には二項的であるとも言えよう。

さらには、Sagey (1986) などの素性階層理論 (theory of feature geometry) においても、例えば次に示すように、喉頭音 (Laryngeal : L) と喉頭外音 (Supra-

laryngeal: SL) の区別や口腔音 (oral) 対鼻 (腔) 音 (nasal) のように二項的に分かれるものと,



調音点 (Place) の接点のように、三項的に分かれる(5)のようなものもある。



分節音のつながりも、子音結合を許す言語と許さない言語に分かれ、子音結合を許す言語では、二つまで許す言語と三つまで許す言語、それに四つまで許す若干の言語に分かれている。子音結合を許す場合でも、頭子音 (Onset) と末尾子音 (Coda) で、許される子音結合の数に違いが見られる。例えば英語では、頭子音では最大限三つまで (e.g. s C L-; 具体例としては、(6)を参照) であるが、末尾子音においては、複数の -s がつくため、次の例からも明らかのように、3 プラス 1 で最大限 4 つまで許されている。

(6) strengths [strenkθs]

さらに、音節の構造としては、子音と母音からなる CV が普通の構造であるが、V や CVV や CVC や VVC などを始めとして、CCVCC, CCCVCCC など様々な複雑な構造が許されている言語もある。どのような構造が許されるかは、類型論的に見て極めて興味のある問題であるが、ここでは立ち入らない。

音節の上の単位としては、韻脚 (foot) が認められている。この単位は、次の 4 種類が許されている。

(7) (i) 有界 (bounderd)

unary	1
binary	2



tameter) と呼ばれ、シェイクスピアなどの有名な詩のかなりのものがこの詩形からなっている。

一方、日本語の俳句の五七五とか、和歌の五七五七七とか、五七調や七五調の詩や文章などは、すべて、休止を考慮に入れると八拍のリズム、つまり二拍子のリズムからなっている。しかも、応援団の「三三七拍子」も休止を考慮に入れると、八拍の繰り返し、つまり二拍子のリズムからなっていることになり、ことばも手拍子も同じ原理のもとに還元できるのである。

なお、音楽のリズムは、既に触れたように二拍子と三拍子、つまり、マーチとワルツのリズムに分けることができるが、言語も、二拍子のリズムをとる言語と、三拍子のリズムをとる言語に分かれる、ということは興味深い。

なお、古英語の詩である古英詩には、岡崎（1999）によれば次のような制約があるということである。

(10) 最小半行制約：

古英詩の半行は、第二韻律平面上に、最低三つのフットを含んでいなければならない。（岡崎正男（1999））

このような三項的な韻脚を含むという趣旨の制約が、古英詩にあったということは、近代以降の英語のリズムが基本的に二項的であることを考え合わせると、極めて興味深い。

以上、本節では音韻論における二項的側面と三項的側面に焦点を絞って、どのようなものが、二項的であり、どのようなものが三項的なものとして考えられるかについて概観してきた。音韻論においても、二項的なものが中心であることには異論はないが、三項的なものも、かなりの言語で見受けられることが明らかにされたと言ってよいであろう。

### 3. 語形成における二と三

本節では、形態論とか語形成と言われている現象に視点を当てて、二項的な性質と三項的な性質について考えてみたい。語形成においては、ゴとゴをたすとジュウではなくてゴになる。ゴとは不思議な力をもっているものである。ということからも推し量れるように、

## (11) 語 + 語 = 語

二つの語を合わせると語が作られる。これは何の変哲もない簡単な規則であるが、この規則をもっているということは、我々が無限の能力を有しているということを示すものである。この規則は、次の(12)に例示するように、理論的には二つの語を結びつけて無限の語を生み出すことができる。

(12)	上下	うえした	*下上	*したうえ
	左右	みぎひだり	*右左	*?ひだりみぎ
	縦横	たてよこ	*横縦	*よこたて
	前後	あとさき	*後前	*さきあと
	表裏	うらおもて	*裏表	*おもてうら
	始終	終始	cf. 始めから終わりまで	
	善悪	善し悪し	*悪し良し	

ただし、どのような語でも生み出すことができるというわけではない。ここでは立ち入らないが、いくつかの制約があり、「上下」はよいが、「下上」排除されるようになっている。

このように語形成においては、二が圧倒的に優勢である。このことから例えば大石（1988：6）のように、二項的なもの以外は存在しないと言い切っている研究者もいる。

- (13) 語構造の枝分かれは二またまでである。すなわち、一つの節点から三つ以上に枝分かれする語構造はない。

しかし、どの言語でも三つの語を合わせて語を作るものが存在している。その例として、次のようなものをあげるができる。

- (14) a. A B C, X Y Z  
           male/female/neuter (Gender)  
           A A A (トリプルA)
- b. いろは  
       雪月花

猪鹿蝶

松竹梅

上中下

1 2 3

大中小

小中高 (小学校・中学校・高等学校)

白髷中

海山川

明浄直

天地人

英独仏

産官学

赤・青・黄 (三原色)

c. 戦前戦中戦後

過去現在未来 ・ 現在過去未来

明治大正昭和

音声形式意味

先輩同輩後輩

司法立法行政 三権分立

神キリスト聖霊

酒たばこ女

酒麻薬女

d. プラス・マイナス・ゼロ

ゲー・チョキ・パー

e. 飲む打つ買う

f. バンバカバーン

キンコンカーン

ピンボンパン

トンテンカン

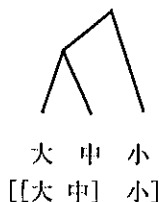
g. ホップ・ステップ・ジャンプ (三段跳び)

多少多めに例を挙げてあるのは、三つのものが一つや二つに限られるものではないということを示すためである。



これらは、次に例示するように、二つと一つの結合に還元することができると思う者もいるかも知れないが、そうではない。

(15) a.

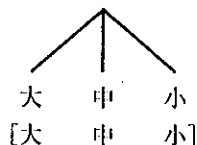


b.



大中小の意味は、「大」と「中」と「小」が並列している(16)のような構造によって示されるものである。

(16)



したがって、これらを生み出す規則は、二項からなる(11)ではなくて、三項からなる次の(17)のようなものでなければならない。

(17) 語 + 語 + 語 = 語

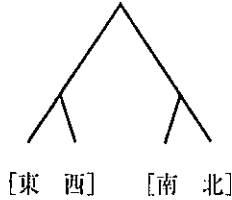
以上の考察から、語形成でも、二項的なものに加えて三項的なものが必要であるという結論が得られるのである。

では、次のような四つの語からなるものはどうであろうか。

(18) 東西南北  
南船北馬  
加減乗除  
老若男女  
上下左右

これらの語は、次のような構造をしており、二つの語の結合をさらに結合させたものと見なすことができる。

(19)



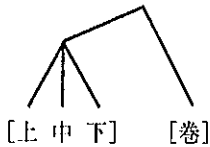
したがって、これらは二項的なものとして処理できることになる。  
四つの語からなるものは、このほかに、次のようなものがある。

(20) 上中下巻

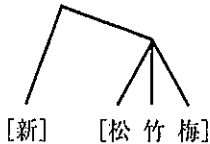
(21) 新松竹梅

これらは、それぞれ次のような構造をもつ語であり、三項的なものと二項的なものとの組み合わせと考えることができる。

(22)



(23)



以上、語形成における二と三の問題についてみてきた。語形成においては、二が中心ではあるが、三も一定の地位を保っていることは明らかである。

## References

- 大石 強 (1988) 『形態論』東京：開拓社。
- 岡崎正男 (1999) 「古英詩の拡大半行について：「最小半行」という概念からの再構築」筑波音韻論研究会7月例会における口頭発表ハンドアウト。
- The Bible: Authorized King James Version*. Piit Brevier Edition. Cambridge University Press.
- Haraguchi, Shosuke (1991) *A Theory of Stress and Accent*. Dordrecht: Foris.
- 原口庄輔 (1993) "On Ternary Feet," *Proceedings of the XVIIth International Congress of Linguists, Québec, Université Laval 9-14 August 1992*. 2, 47-50.
- 原口庄輔 (1993) "Ternary Feet Reconsidered," 『筑波英学展望』12, 67-86. 『英語学論説資料』第4分冊, 274-83.
- Sagey, Elizabeth C. (1986) *The Representation of Features in Nonlinear Phonology*. Dotoral dissertation, MIT. Published by Garland in (1991).